

2006年(ワ)第6484号

謝罪及び損害賠償請求事件

原告 王 子雄 外39名

被告 日 本 国

意 見 陳 述 書

——歴史を心に刻み、侵略を忘れず、民族の尊厳を保ち、
無辜の被害者のために正当な道理に基づき、
日本政府に謝罪と賠償を求める——

2007年1月24日

東京地方裁判所民事第13部 御中

中華人民共和国四川省峨眉山市白龍南路79号3棟5-3号

重慶大爆撃被害対日賠償請求訴訟原告 吳 紹武

1 私は吳紹武と申します。1932年生まれで今年74歳です。

1939年に日本軍が樂山を爆撃した当時、私の家族は、母吳淑珍(36歳)、兄彭金華(9歳)、祖父吳伯階(58歳)、祖母吳魏氏(57歳)と私(7歳)の5人家族で、樂山で生活していました。父は私が2歳の時に病死し、このため母方の祖父母と同居するようになったのです。

祖父の吳伯階は、清末に科挙に合格した樂山で唯一人の「秀才」で、樂山周辺では有名な書道家でした。祖父は、書画を表装して販売する店を営っていました。自宅は、店舗兼用で樂山城區府街の由緒ある「息塵旅館」の左側にあり、建物の表側は店舗で、裏側は寝室、倉庫と厨房でした。

2 1939年8月19日、午前11時ころ空襲警報が鳴ったため、私は、祖父母と一緒に家からおよそ400メートル離れた「龍頭山」という小山の桑の林へ避難しました。避難場所に着いて間もない12時ころ、緊急警報が鳴り36機の日本軍機が樂山大仏の方角から飛んできました。

まもなく、爆弾が炸裂する音が聞こえ、一瞬の間に樂山の城内ではもうもうと煙が立ち上り、火も四方から上がり、泣く声、叫ぶ声、罵る声が絶え間なく耳に入ってきました。

私は、ちょうど蒸し暑い季節だったのでランニングシャツだけを着ておりましたが、爆裂した爆弾で跳ね上がった泥を身体中に浴びてしまいました。

祖父に「動くな」と言われたので、私はびくびくしながら地面にうつぶせになっていました。ときどき頭をかすかに上げて周囲を見ると、城内は炎の海になっていました。日本軍機は依然として樂山の上空を飛び回り、絶え間なく爆弾を投下していました。その後、日本軍機は低空を飛びながら機銃掃射も加えてきました。

3 日本軍機が去った後、祖父母と私の3人は、すぐ母と兄を探しに行きました。普段は、警報が鳴ると、みんな「海棠湾」（家のある府街からおよそ1キロメートル離れている）地域を通して、「老肖頂」（府街からおよそ2キロメートル離れている）の方面へ避難するので、私と祖父母は、母や兄と合流するためにそちらへと向かいました。

海棠湾に着くと、私たちの目に入ったのは、至る所に燃えあがっている黒い煙と散乱した死体でした。爆撃によって数十軒の住民が居住している海棠湾がほぼ全面的に破壊され、地面に直径数十メートルもある大きな着弾の穴がありました。周りからは、泣く声、叫ぶ声が絶え間なく聞こえていました。

私と祖父母は、瓦礫の山や重なり合った死体の中から、母と兄の姿を探し続けました。かなり時間が経ってから、やっと死体の中から数発の銃弾が当

たって顔が血だらけになっている子供の死体を見つけました。顔をよく見ると、その死んだ子供は私の兄だと分かりました。

母もきっと近くにいて、祖父母と私は泣きながら母を探し続けました。少し離れたところに倒壊した家屋の下敷きになって身体の下半身が見える女性がいました。その女性はすでに息が絶えていました。服や靴下、靴などが母のものと同じでした。母はいつも靴下にお金を入れているので、靴下を脱がせてみました。靴下から金が出てきたので、この女性は母に間違いないと、私たちは確信しました。それから周りの人々の手を借りて母の遺体を廃墟の中から運び出しました。

祖父母と私は、母と兄が死んだため悲しくてなりませんでした。2人の葬式をしなければなりませんので、樂山城内にあるすべての棺桶屋を回りました。爆撃で倒壊された店もあり、残った店もすでに棺桶が売り切れでした。仕方がなく私たちは母と兄の遺体をムシロで包み、亡父も埋葬されている「西湖塘」という山にある無縁墓地に埋めました。

- 4 私の家の家屋も、爆撃で大きな打撃を受けました。表側の店の方は形が残ったものの斜めになり、裏側の寝室や厨房などは全壊し、家財や倉庫にある祖父の書籍、貴重な骨董品の古代の絵画なども、全部失いました。その中には例えば、中国の有名な画家呉昌碩、齊白石、張大千、徐悲鴻などの作品もありました。

翌日の朝、祖父は、私を連れて爆撃を免れた町に食べ物を探しに行きましたが、至る所においてまだもうもうと煙が出ていたのを目の当たりにしました。土橋街から、鉄牛門、較場壩までの一帯が廃墟になり、あちこちに死体が散乱し、一番怖かったのは焼け焦げた死体と、焼け焦げた木の上に掛かっていた黒くなった足、頭と腸でした。

5 私の伯母の呉叶氏（母の姉、当時39歳）は、当時県城近郊柏楊坝で2人の娘と共に生活し、針仕事をして生活していましたが、母と兄が爆撃で死亡したことを聞いたために、毎日泣き続け、傷心のあまり翌年に亡くなりました。

祖父には2人の娘しかいなかったもので、母と伯母が亡くなってから、私たちは親族がいないこの樂山県城を離れて、祖母の親戚が住んでいた樂山鎮子場（現在の峨嵋山市符溪鎮）に住むこととなりました。祖父が表装した書画などを売って生活しました。2年後、祖父はリウマチになったため、祖父と同じ呉氏一族出身の漢方医が住んでいる牛華鎮に移住し、私はその医者の家で手伝いの仕事をしながら、小学校に通っていました。

また数年後、祖父も亡くなり、祖母は私を連れて、祖母の出身地で、伯母の娘が住んでいる峨嵋県に引っ越しました。私は、伯母の娘の嫁ぎ先の集成商店で奉公人として働きました。集成商店は白蠟の製造と販売を経営し、5人ほどの徒弟を雇用していました。私たちは、毎朝4～5時に起き12～13時間働きましたが、暖かい服もなく食べ物も一日2食、粗末なものしか食べられませんでした。学校には行けませんでした。

1950年8月、私は、会計の勉強をして、翌年に峨嵋県政府に勤めるようになり、1992年に定年で退職しました。

6 1939年8月19日から67年を経た今日においても、樂山の人々は、この日本軍の爆撃を忘れることができません。爆撃で死傷した2000人を超える被害者の遺族は、いまや健康な人の方が少なく、大部分の遺族は決して忘れられない悲痛な気持ちを抱いたまま亡くなってしまったのです。

現在、原告団に登録している樂山の爆撃犠牲者の遺族は約40世帯います。当時の爆撃の状況を知っているものは、みんな70歳代、80歳代の高齢者であり、原告団会議を開いて当時の爆撃の状況を思い出すたびに、私たちは

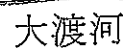
悲しくて涙が止まらないのです。そしてみんなが口を揃えて「日本軍の侵略、樂山に対して犯した犯罪行為を告訴しなければならない。『愚公、山を移す』の気概をもって裁判を勝訴までやりぬく」と決意を述べ合っています。

私たちは犠牲者の遺族として犠牲者らの無念を晴らさなければならないのです。私たちは日本政府に対して謝罪と賠償を強く要求します。

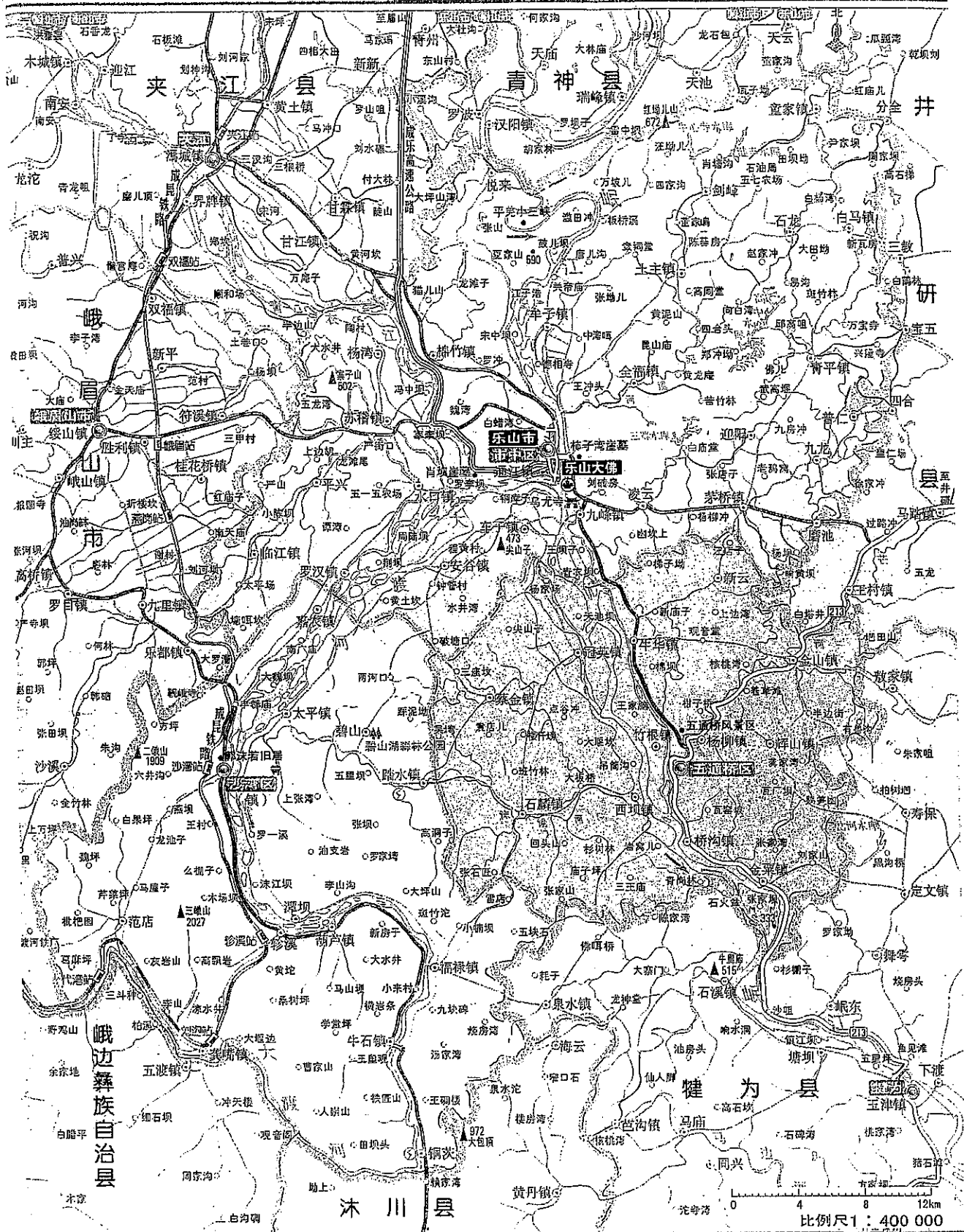
以上

(樂山県城内外街道図より作成)

黄緑色 火災による被害の激しい街路地区

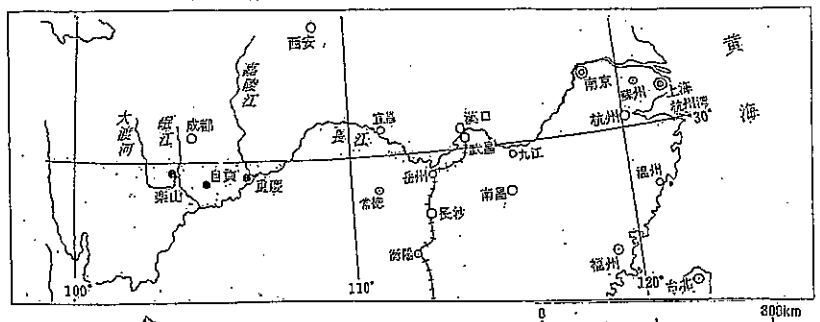


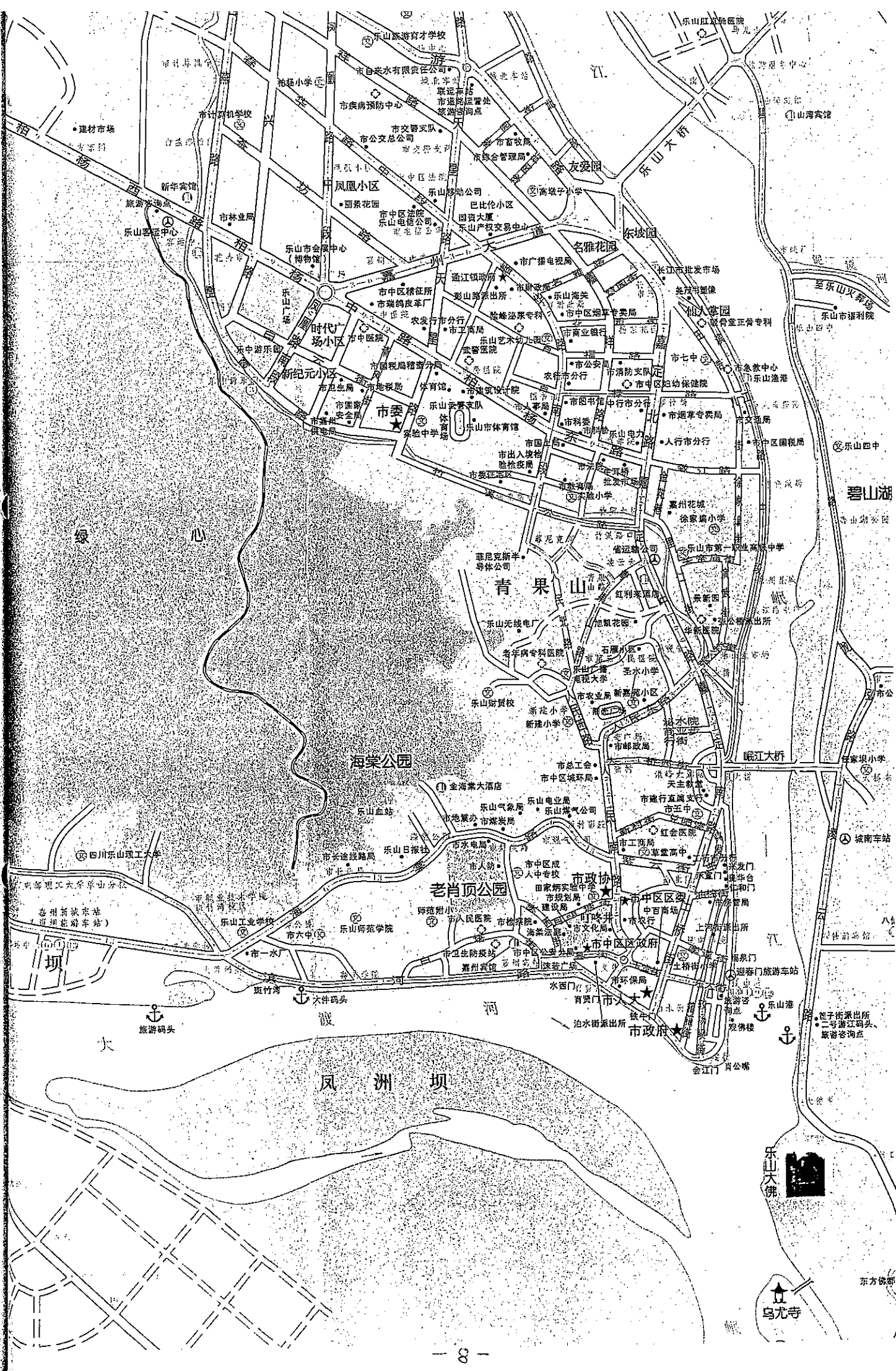
- 6 -



出典：『四川省地図冊』（成都地圖出版社、2005年）

重慶大爆撃関連地図（●印は本訴訟の爆撃被害地）





泰山大佛

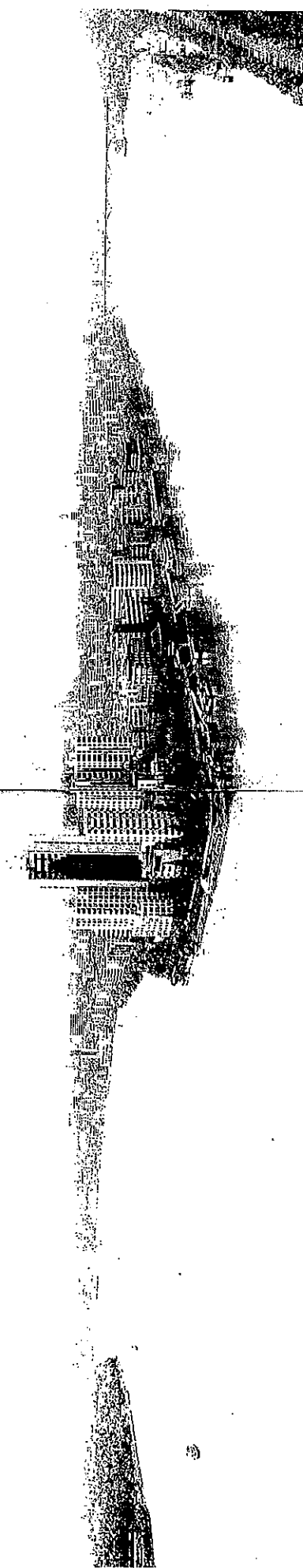


泰山大佛



“天晴见峨眉，如向波上浮。”（唐·岑参）

泰山大仏から対岸の泰安市街を臨む。
右手の川が岷江、左手の川が大渡河。



左手の雲の中に見えるのが峨眉山。

市中心城区远眺